

会員近況



日本工業大学
工学部システム工学科 正道寺 勉

学生さんはフルタイム!? 今年の新学期から2年目の教師生活に入りました。大学では2年次科目の「生産管理実験」を手伝っています。工学は実学でなければならない、という立場に立って学生の指導に当たっています。今後の方向としては品質管理にORを導入してみたいと考えています。小生の興味は大学院時代から非線形最適化問題の分野に向けられており、現在なおその方面の研究を続けています。ところが、この非線形最適化問題というのは非常に難解な代物でして、とても一筋縄ではゆきません。ここ数年、茨の道を少しずつ牛歩の如く進んできた積りですので、今さらもどるわけにもゆきません。最近では氷壁を前に、いかにして登るべきか思案に暮れています。小生が大学院の学生だった頃、「学生さんはフルタイムだからネ」とよく言われたものです。この言葉は、何の制約も課せられておらず勉強しようと思えば1日中勉強できるのだからしっかり勉強しなさい、という励ましの言葉だったわけです。この言葉が身に染みて感じられる今日この頃です。学生諸君! 頑張ってください。

大分大学
工学部組織工学教室 杉村 正彦

早く研究室にもどりたい 昭和52年12月28日から、2年間の任期で、大分大学の学生部長の職にあります。この間、昨年7月初め、この10年来の学生会館の管理・運営をめぐるの異常状態を、全学生・教職員との円満な話し合いによって無事、解決することができました。以後昨年8月から引き続いて、学生会館問題の解決の事後処理・締めくくりに精進しております。大体、本年の10月までには、すべてを終えて、全学生・教職員のための新福利厚生施設の竣工・オープンをも迎えて、学園も平和な、しかも研究・勉学のための楽しい環境に生まれ変わることと思っています。したがって、この2年間は、

ほとんど研究らしいこともやっておりません。ただ、ただ、早く任期を終えて、早く研究室へもどって、以前のように、統計的逐次解析の勉強に取りかかりたいものと、念願している今日この頃です。

協賛計算センター
応用システム部OR課 星野 義一

ここ1年取扱った問題は、税収予測、成績分析、顧客診断、環境調査、販売管理、品質管理等です。具体的な問題を直接解決する場合よりも、むしろ抽象的な問題を分析して解決すべき具体的な問題を見つけ出し、それを解決する機会が多いように思います。

問題を解決する場合、とくに論理的な判断と感覚的な判断の組合せに注意を払います。一般的に、論理的な判断は具体的な問題を解決するときに有効であり、感覚的な判断は抽象的な問題を解決するときに有効です。1つずつ論理的に組立てて結論を導き出す方法も重要ですが、感覚的に結論を導き出してその妥当性を検証・確認する方法も重要です。

ところで、今年も社内教育においてORの講師を担当することとなりましたが、ORそのものだけではなく、ORを通じて、ものの考え方、論理的な判断、感覚的な判断を実務的にも私的にも役立たせることができるように教育したいと思っております。

川崎重工産業動機事業本部
企画室管理技術部 殿岡 元治

私は入社後満9年になります。この間、ずっと電算機関係業務にたずさわってきました。電算機の仕事は、合理化そのものと言っても過言でないと思っています。では、その合理化とは何かというと、私はつぎのように考えております。「合理化とは、定着化する合理化でなければならない。物の合理化、手順の合理化がこれに当る」と。そして電算機サイドからみた合理化は、プログラムの組み方に非常に左右されるのではないかと考えております。

これまでにならずさわった主な仕事は、まずワイヤリング・システムといい、航空機の電子装備関係のワイヤーの設計情報をインプットし、ワイヤーの設計図面、および、工作の作業指示をアウトプットし、さらに、資材情報に結んだシステムです。その後、発動機事業部に移

り、プログラム作成手順のシステム開発標準化に手を染め、さらに、ワイヤリング・システム以来の懸案だった類似組立に従事しました。類似組立とは、図面上の部品を以前に使用した部品情報を使い、新たに、部品情報をおこす手間を省こうというものでプログラムの信頼性を考慮しています。以上、現在の所感、および、過去に行なった仕事について述べました。

防衛大学校 今村 和男
社会科学教室

F4 ファンタム選択について、このところテレビ、新聞などでさまざまな報道がなされています。私はそれに深く関わった一員として防衛庁、自衛隊に何の不正もなかった事を、はっきり申したいと思います。私の航空自衛隊OR班長としての最後の仕事でした。一所懸命取組んだだけ、不正があったように言われると情なく、否無性に腹が立ちます。日本の政治は本当に改めなくてはなりません。そのため毎日心より祈っております。しかし一方で私が考えてもいなかったことがF4導入におこっております。騒音問題です。このためF4の展開は未だに完了していません。住民からの補償要求を全額飲むとしますと、防衛予算は人件費を除く残り全部を充当しなければならぬ巨額に上ります。現実の支払額も、防衛庁の全研究開発費より多いのです。難しい世の中になりました。ここにも政治の貧困を痛感せざるを得ません。昨年米国の国防省を訪ね旧友といろいろの話をしましたところ、向こう様も同じ状況で、自由陣営はこれで大丈夫なのだろうかと本当に不安になりました。ORはますます難しい時代になりました。若い方々のご尽力を心より期待しております。

神戸商船大学 原 潔
航海学科

船舶の運航技術を教育研究する航海学科に所属し、主として、操船運用学を基礎にして海上交通システムの研究や講義を担当しています。操船とORはとくに関係がないように思われますが、たとえば過密な航路で船を安全運航するには、自船の操縦性能、他船の航行状態、それに気象、海象といった各種の条件をみながら航行するために、OR的思考が必要になってきています。数年前に避航する能力と必要な避航回数との関係に待ち合わせ理

論を応用し、航路内での衝突の危険性を推測したことがあります。船の運航は各種の交通機関のうちで人間の判断のウェイトが最も大きいだけに今後の研究課題は山積しています。現在は操船を人間-機械系としてとらえて、操船シミュレータを使って各種の実験的研究を続けています。

社会情勢に対応して、本年4月から航海学科が分離改組されて、学生定員20名の輸送科学科が発足し、私もそこへ転科する予定になっています。この学科では、海陸一貫輸送システムの管理技術を教育研究することを目標にしておりますので、これからはOR学会との関係がより一層深くなるものと思っております。

日本科学技術研修所 平本 巖

本誌の編集委員として、現在、フォーラム欄を担当しています。この雑誌は、1000部以上が学会員でない方々からも購読されているということですし、賛助会員の会社などでは、従来ORに無縁だった方々の目にとまることもあるだろうと思ひ、一般の方々にも読んで面白く、できたら少しは役に立つような記事を集めていきたいと考えています。

そのために、オペレーションズ・リサーチという枠にとらわれない2頁の読み物を面白い話題をおもちの方に書いていただくよう努力しています。また、書評も毎月欠かさず載せていきたいと思ひます。その本を一気に読み上げたような気にさせる書評、その本を読んでみたくなるような書評、あるいは書評を通して紹介者の主張が表現されているようなものなど、書店で1冊買い求めたときのあのいい気分をこの雑誌で毎月味わっていただきたいと思ひます。

それから、従来の「支部研究会報告」と「支部だより」を1本にして、各支部での話題を読み物風に紹介していただくことにしました。地理的な順番でなく、話題のあるところから原稿をいただいこうと思ひます。

近況報告がなにやら編集後記の付録みたいになってしまいました。小生、電力中研から日科技研へ移って早10年、現在は同社の計算センターの営業部長として元気にやっております。